

Contents

\*\*\*\*\*

特集：ジェフォーズ上院議員の議	1p
<今週の”The Economist”から>	
“What one man can do” 「たった一人の反乱」	7p
<From the Editor> 「典型的なセネター」	8p

\*\*\*\*\*

特集：ジェフォーズ上院議員の議

大型減税案が議会を通過し、国家エネルギー政策も発表し、次々と懸案を消化しつつあるブッシュ政権。ただし就任100日を越えたあたりから風当たりも強くなり、「レーガン政権以上に保守的」という評判も定着してきました。

そうした中で勃発したのが、穏健派の上院議員、ジム・ジェフォーズの共和党離脱です。これで上院の勢力図が逆転し、攻守が入れ替わります。ここまで快調に飛ばしてきたブッシュ政権ですが、これは重大な転機になりそうです。今度の造反劇の背景と、今後の米国政治について展望してみます。

米国上院の微妙なバランス

米国上院の議席数は100。2000年選挙の結果は共和党0、民主党50のまったくイーブンだった。これは1881年以来の現象。まったくの与野党伯仲だが、上院議長は副大統領が兼務することになるので、賛否同数の場合はチェイニー議長が投票する。ゆえに共和党が優位となる。ここまでの話をご存知の方が多いと思う。

両党の院内総務（Leader）は権力の分担方法について協議し、1月5日には「ロット・ダッシュル合意」が成立した。上院内の委員会運営は従来通り共和党が独占する。つまり委員長ポストはすべて共和党が取る。ただしすべての委員会で配属議員数を共和、民主で半数ずつとする。スタッフ採用予算も折半し、採用人数も同数。そしてここが重要なところだが、「議員の辞任や死亡により、50対50の均衡が崩れたら、自動的に既存の上院規則を適用する」というものである。

一見、民主党が損をするように見えるが、共和党の現職上院議員には病状が悪化しているヘルムズ議員、98歳という高齢のサーモンド議員がいる。この2人が死亡ないし引退すると、どちらの選挙区も州知事は民主党なので、代役になる上院議員は民主党になる。その時点で与野党の均衡は逆転する。民主党としては「先憂後楽」を狙った妥協策だった。

案の定、2月2日にサーモンド議員は「過労のため」入院する。このときは4日に退院して事無きを得たが、「100歳まで議員を続ける」という同議員の元気がいつまで続くかは神のみぞ知る。共和党にとっては、上院で時限爆弾を抱えているようなものである。

ところが両人が無事であるにもかかわらず、4月24日、ジェフォース議員が共和党からの離脱を宣言した。これにより議会内勢力は民主50、共和49、独立1となった。民主党には思ったより早い「棚からぼた餅」となった。これで上院指導者(Majority Leader)の座は、共和党のロット上院議員から民主党のダッシュル上院議員に移る。そして委員長職は全部民主党が取る。与野党は逆転し、1994年以來続いてきた共和党による上院支配が終了した

## 造反をもたらしたものの

ジェフォース議員の公式サイトには、今回の行動についての声明文が掲載されている。<sup>1</sup> 同氏は昨年の選挙で三選を果たしたばかり。離党の決断は相当な重みを伴ったことは想像に難くない。有権者に対する説明義務があるし、自分の決断がプッシュ政権に与える打撃を考えれば、相当な非難を覚悟する必要がある。

声明文は、「私を知る人、そして私がヴァーモント州を愛していることを知る人のために」という書き出しで始まる。ジェフォースは、ヴァーモントがもっとも早く奴隷制を違憲とした州であり、マッカーシズムを終わらせた上院議員を輩出したこと、そして敬愛する州出身の共和党上院議員たちは皆、穏健派の鑑のような人々であったことを述べる。

つまりヴァーモント州はリベラルな伝統を持ち、独立心を重んじる州なのである。ジェフォースの決断は、この独特の選挙区事情を抜きにしては考えられない。たとえば人口の少ない同州では、下院議員は一人しかいないが、そのバーニー・サンダース議員は二大政党に属さない独立系の議員。しかも元社会主義者という変り種である。

ジェフォース自身も、かねてから民主党寄りの議員だった レーガン減税に反対し、クリントンの国民健康保険に賛成し、クリントンの弾劾裁判では反対票を投じた。最近の投票行動を見てもそれは変わらない。最近の投票行動もきわめてリベラルだ。<sup>2</sup> 「人口中絶は女性の権利」「中国へのPNTRに反対」「ゲイに対する雇用不差別法案を提出」「CTBTに賛成」「北極圏の野生動物を永久的に保護」「選挙資金改革法に賛成」「銃麻薬違反への厳罰に賛成」「タバコ規制増加に賛成」「社会保障基金の民営化に反対」などがある。

---

<sup>1</sup> <http://www.senate.gov/~jeffords/>

<sup>2</sup> [http://www.issues2000.org/Senate/Jim\\_Jeffords.htm](http://www.issues2000.org/Senate/Jim_Jeffords.htm) 日本にもこういうサイトが欲しいですね。

米国議会には日本のような討議拘束がないから、こういう共和党議員がいても不思議ではない。ジェフォーズのこうした主張は選挙区ではよく知られている。事実、先の選挙では65.5%もの支持を得ており、選挙にはめっぽう強い。

さて、ジェフォーズが離党を決断した核心部分は次のように説明されている。

・私は少しずつ、自分が党に対して反対していることに気づきました。多くの人が私よりも保守的であり、彼らが共和党を構成していることは理解しています。この政党の性質が変化してゆくにつれて、党の首脳部が私に対し、私が首脳部に対することは困難になってきました。実際のところ、党が選挙で勝ったことで、私が党内で直面するジレンマはますます強くなりました。

・過去において、大統領が居なかった時代は、議会内の共和党では議論をして党の政策課題を作り上げる自由がありました。ブッシュ大統領の当選がそれを変えました。われわれは議院内閣制に生きているわけではありませんが、私のように議員に選ばれる榮譽に浴してきたものにとり、大統領の政策を支持するのは自然なことです。

・それでも、私は次第にそれができなと感じ始めました。私を知らない人々は、私が大統領の予算に抵抗するのが楽しいのだとか、脚光を浴びるのを喜んでいるのだと思ったかもしれませんが、それはとんでもない間違いです。私は予算に対して深刻かつ深い危惧を抱いており、今日や明日のために行われている決定についても同様なのです。

・前途を考えれば、非常に基本的な問題において、私が大統領と意見が合わせられないことが分かってきました。中絶、司法、税と支出、ミサイル防衛、エネルギーと環境、その他大小さまざまな問題についてです。私にとって最大の問題は教育です。私の出身州は、アメリカに公用地払い下げによる大学システムを残したモリル上院議員を輩出しました。彼がいた時代の共和党はすべての人々に機会を与え、あらゆるアメリカの子供に公立学校教育の門戸を開きました。だが今では、公立学校から出ていく生徒の数で成功が語られるようです。

つまり、昨年秋に当選した時点では離党など考えてもいなかったが、ブッシュ大統領の下で急速に保守化した共和党ではこれ以上やっていけない というのである。

## 国民からは一定の理解

保守系のコラムニストの間では、ジェフォーズ議員の離党は「政治クーデター」であると評判が悪い。たしかに民主党は「造反」を働きかけた形跡がある。これまで公正・教育・労働委員長だったジェフォーズ議員に対し、環境・公共事業委員長のポストを提示するという噂もある。とはいえ、正式発表の夜にギャラップ社が実施した世論調査を見ると、ジェフォーズ議院の決断に対する国民の評判は必ずしも悪くない<sup>3</sup>

---

<sup>3</sup> <http://www.gallup.com/poll/releases/pr010525.asp>

Q：ジェフォーズが独立系になることにより、上院は民主党支配になりますが、これは国にとって良いことでしょうか。

A：良い 43%、悪い 35%、分からない 22%

Q：ジェフォーズは辞任して、独立系として再出馬すべきでしょうか。それともこのまま6年の任期を全うすべきでしょうか。

A：辞任すべき 35%、とどまるべき 58%、分からない 7%

Q：この結果、共和党と民主党の間はどうなるでしょうか。

A：より協調する 15%、より衝突する 50%、変わらない 30%、分からない 5%

Q：ジェフォーズ上院議員は、離党の原因のひとつは、ブッシュ政権下で共和党が保守的になり過ぎたからだといえます。どう思いますか。

A：賛成 50%、反対 42%、分からない 8%

最後の設問に対しては、共和党員の回答者のなかでも20%が賛成している。「ジェフォーズ議員の議」は、それなりに賛同者を得ていると考えていいだろう。

### ブッシュ流保守主義の正体

実際、ブッシュ政権は発足後4ヶ月、多くの政策課題を打ち出してきたが、「レーガン政権以上に保守的」という評価は少しも大袈裟ではない。これまでに取り上げたアジェンダはどれも保守色の強いものであり、しかも性急に打ち出されている。当然のように、リベラル派の反発は強まっている。

#### ブッシュ政権の主要アジェンダ

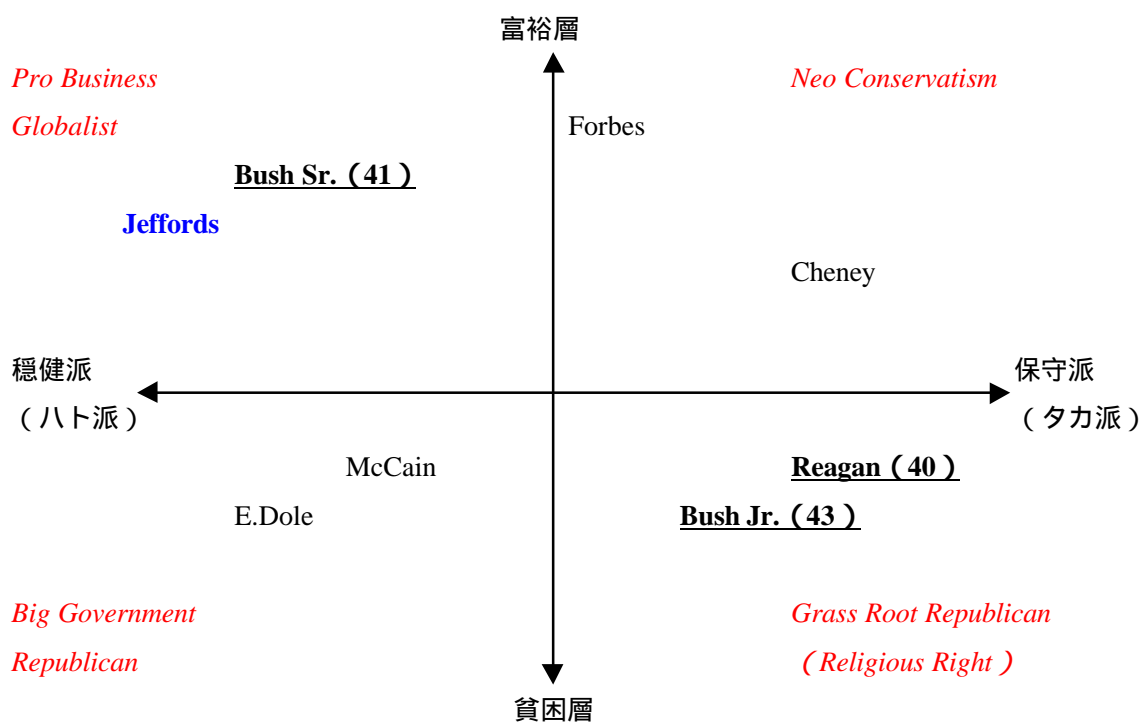
- < 財政 > 10年間で1.6兆ドルの大幅減税案を提出 (2/8) 1.35兆ドルで成立(4/24)
- < 環境 > 地球温暖化防止京都議定書からの離脱を表明 (2/28)
- < エネルギー > 国家エネルギー政策を発表。原子力開発再開。国内のガス、石油開発。(5/16)
- < 防衛 > NMDの推進を言明 (5/1)
- < 外交 > 台湾防衛を宣言。中台関係の「曖昧政策」を否定 (4/26)

1月20日にこの政権が発足したとき、「フロリダ再集計のトラブルを考えれば、ブッシュ新大統領は民主党が賛成しやすいような課題から順に取り上げていくだろう」という読みが多かった。たとえば国民の関心が高い、選挙資金制度改革の問題などである。

ところがブッシュ政権が選んだのは正面突破策だった。「向こう10年間で1.6兆ドル」という選挙戦のときの公約を、そのまま法案として議会に送ったのを始め、従来の主張をほとんど変えることなく実行に移し始めた

ここに至って明らかになってきたのは、「ブッシュは穏健・中道派ではなく、保守本流の政治家だった」ということである。Compassionate Conservatism (温情ある保守主義) というスローガンや、ヒスパニック票を意識した選挙戦術、そして何より父のジョージ・ブッシュ41代大統領のイメージが強かったために、ブッシュは中道寄りの印象があった(筆者もそう思っていた)。だが、ブッシュ43代大統領は父親とは違い、生っ粋の南部出身の草の根保守主義者であると考えた方がいいようだ。

共和党内地図



### ブッシュ支持層は「草の根保守派」

冷戦終了後の共和党は、「反共産主義」という共通の旗印を失い、党内のとりまとめに苦勞し続けてきた。大統領選挙で勝とうと思ったら、無党派層の票を取るために中道寄りにならなければならない。だが、あまり左に寄ると、党内の右派勢力に見離されてしまう。

90年代の共和党はこのジレンマに苦しみ続けた。すなわち、92年のブッシュ・シニアは左に寄り過ぎて失敗し、96年のドールは右に寄り過ぎて失敗した。この間に勝利者となったのは、民主党内で大胆に中道寄りの政策を打ち出し、中間派の有権者をつかんだクリントンだった。

今から考えれば、2000年選挙におけるブッシュ戦略は、一種の逆転の発想ともいべきものだった。つまり、宗教的右派と呼ばれるような極端なグループも含め、党内右派の支持を確実に得ておく。その上で中道寄りのポーズを演じて、無党派層の支持をある程度取れば勝てるという計算である。選挙結果を振り返ってみれば、ブッシュが獲得したのは南部や西部の草の根保守層が強い州だった。当選後のブッシュ大統領は、こうしたコア支持者にアピールする政策を実施していく必要があった。

草の根保守派のメンタリティは、彼らが「欧州を逃れて新大陸にやってきた人々の子孫」だと考えれば理解しやすい。

彼らが「小さな政府」を目指すのは、政府というものを頭から信じていないからである。ワシントンに集まるような連中は信用できない。だったら彼らの権力はなるべく小さくしておいた方がいい。ゆえに減税を、となる。経済政策のことなどはあまり念頭にはない。

外交政策については、モンロー宣言に端を発するようなユニラテリズムが根底にある。つまり米国のことは自分たちで決める。他国が米国に口出しすることは許さない。国連のような国際機関はまったく信用できない。まして京都議定書のように、米国の行動を束縛する条約はもってのほかだ。共和党の中でも、環境問題や国際協調を重視する意見は強いけれども、それは金持ちやインテリ層の意見であって、草の根保守派の気分はまったく別物である。

NMD推進も草の根保守派的な発想といえよう。大量破壊兵器を開発するような邪悪な国家があるのは仕方がない。だったらハイテク技術による「ミサイルの盾」で米国を守れば、外国のことなど気にしなくてよくなる。

こうしたある種の単純明解さを持つのが草の根保守主義の気分である。ブッシュ新政権の出方は、こうしたメンタリティを念頭に置くと理解しやすくなる。

## 「頂門の一針」に

しかし、ブッシュ政権の保守主義路線に反対するのは、民主党だけではなかった。共和党内部でも、ジェフォーズ議員のような穏健派がついていけなくなった。この事実が意味するところは大きい。

ひとつは民主党が上院をコントロールするようになったこと。来年秋の中間選挙をにらみ、両党の対立は今後ますます激化するだろう。わずか4ヵ月で大型減税案を通したような成功は、今後は難しくなる。さらに共和党内の路線対立も深まりそうだ。第二、第三のジェフォーズを作るわけにはいかないので、党内融和の必要にも迫られる。

いずれにせよ ブッシュ政権は基本戦略の見直しを迫られよう 予定通りにどんどんアジェンダを片づけていくような流儀はもう通じない。「ジェフォーズ上院議員の議」はブッシュ政権に対する「頂門の一針」になりそうだ。

## < 今週の“The Economist”から >

“What one man can do” May 26th, 2001 United States  
「たった一人の反乱」 (p.39-40)

\* 米国議会上院では、一人の議員の行動により0対50の均衡が崩れました。ブッシュ政権にとっては“A cruel blow”になるというのが“The Economist”誌の分析です。

< 要約 >

ジム・ジェフォーズ上院議員が共和党から離脱した。今後は民主党と連携する。小さな一歩だが、これで民主党が上院で多数派を形成する。民主党は誘い、共和党は引き止めた。民主党は上院の有力委員長職を提示し、共和党も利益供与を確約した。共和党はブッシュ政権寄りのミラー上院議員に共和党への移籍を誘った。が、どちらの試みも無駄に終わった。

ジェフォーズは「ロックフェラー・リパブリカン」<sup>4</sup>の数少ない生き残り。かつてこの党を支配した北東部出身の名門たちは、今では南部や西部出身の保守派に押されている。ジェフォーズはブッシュの保守路線に不満だったが、対立はエスカレート。ブッシュ減税案に反対した腹いせに、ホワイトハウスはヴァーモント州出身の教師を称える会合に彼を招待しなかった。さらに同州への乳製品補助金にも反対。ブッシュが有力議員にこびへつらわないのは当然だが、ジェフォーズを侮辱したり脅迫したことは、分別のある行為ではなかった。

ブッシュ政権の勢いは止まり、2つの事実が明らかになった。ひとつは共和党をまとめることの困難さ。他の北東部選出の穏健派議員も南部派に不満を抱いている。もうひとつは共和党の数のもろさ。ほかにも病人のヘルムズ議員、98歳のサーモンド議員が控えている。

ジェフォーズはブッシュ減税案を1.6兆ドルから1.35兆ドルに減額させ、障害児への教育支出増額にも健闘した。過去の投票記録は民主党寄りであり、彼自身に違和感はない。頑固自慢の選挙区もこれを異としない。それでもこれで民主党は多数派となり、上院指導者も民主党になる。委員長職はすべて交代し、民主党が上院を掌握する。

ブッシュにとっては悲慘なニュースである。23日には修正済みの減税案が上院を通過した(ジェフォーズも賛成)。しかし今後は民主党優位の上下両院で政策課題を実現していく必要がある。最高裁判事を保守派で固めることももう難しい。他の指名も難航しそうだ。ブッシュがよく言う「超党派で」という言葉も変容を迫られる。右派の民主党員を一本釣りするのではなく、今後は民主党指導部を相手に取り引きする必要がある。

民主党は沸き返っている。選挙後の彼らは政権を失い、ホワイトハウスに裏をかかれっぱなしだった。上院の多数派を掌握したことで、党内はまとまる。民主党は上院での多数を利用してブッシュ父の政権を引き摺り下ろした。同じチャンスが巡ってきている。

<sup>4</sup> ネルソン・ロックフェラー副大統領のように、富裕層出身で穏健派の共和党員。

## <From the Editor > 典型的なセネター

アメリカ映画にセネター（上院議員）が登場するとき、そのほとんどは悪役です。セネターは劇中の巨大な陰謀の黒幕であったり、災害の中を自分だけが助かろうとしたり、再選されることだけを気にするケチな野郎だったりします。もっとも日本の映画でも、政治家が登場する場合は似たようなものですから、このこと自体は異とするに足りません。

面白いのは映画に出てくるセネターたちが、みな同じタイプであることです。背が高い白人男性。額が広くて、髪の色は白か銀。知的かつ温厚で、いい笑顔を作ることができる。ブレザーにボタンドアウンのシャツが似合って、いかにも東部のアイビーリーグの大学出身という風情。2億5000万人のアメリカ国民を代表するわずか100人のエリートが、そろいも揃ってこのタイプというのが不思議なくらいです。昔はともかく、今では女性13人、アジア系2人、ネイティブ系1人のセネターが誕生しているのですから。

何が言いたいかといいますと、ジェフォーズ上院議員こそは、映画の中から出てきたように典型的なセネターなのです。顔を見てみたい方は下記をご参照ください。

[http://www.economist.com/world/na/displayStory.cfm?Story\\_ID=635382](http://www.economist.com/world/na/displayStory.cfm?Story_ID=635382)

ニューイングランド出身、エール大学とハーバード大学を卒業し、弁護士資格を持ち、下院14年、上院13年のキャリアの持ち主。これぞ絵に描いたようなセネター。本来の共和党とは、こういう人たちが作った党だったのでしょ。

ところが現在のブッシュ政権は、この手のインテリで名門出身のタイプが見当たりません。主要閣僚の前歴を見ると、軍人や経営者といった体育会系の間が多く、出身地で言えば南部や西部が多い。ジェフォーズのような東部エスタブリッシュメントの秀才タイプは、不遇をかこっている様子。

ジェフォーズがブッシュ政治に我慢がならなくなったのは、こういう党内の「南北問題」があったことも一因ではないでしょうか。

編集者敬白

- 本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、日商岩井株式会社の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒135-8655 東京都港区台場 2-3-1

<http://www.nisshoiwai.co.jp>

日商岩井ビジネス戦略研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-2183

E-MAIL: [yoshizaki.tatsuhiko@nisshoiwai.co.jp](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@nisshoiwai.co.jp)